■対談

「魅力ある先生が魅力ある人間を育てる」

三千家のひとつ、武者小路千家の第14代家元として、400年以上にわたる利休以来の茶の湯の道統を継承してきた千宗守さん。茶道を海外に紹介し、大学で講義するなど、その積極的な活動は伝統と古式のみを墨守することなく、「伝統とは革新の集積である」という信念によるものです。河田学長との対談では、茶の湯の魅力をはじめ、日本の教育システムや国際交流などについても語っていただきました。「茶の湯などの文化は『無用の用』。なくても生活できるが、その文化が品性を育てる」と語る家元の教育観は、「品格ある国際人を育てたい」という河田学長の願うところです。

「無用の用」の文化は人間の品格の源

千　宗守　◆武者小路千家 家元、財団法人官休庵 理事長
河田 悌一　◆学　長

京都市上京区の武者小路千家　露地で

◆「茶道」を育てた日本の教育システム

河田　お家元とは私が弟子入りさせていただいて以来、約25年のお付き合いになります。私が文学部長を務めているときには、2年にわたって「茶の文化史」のテーマで、講義も担当していただきました。お家元の授業は学生たちに大きな刺激になりました。

千　私の方も「教える」ということを通じて、諸先生方、そして学生の皆さんと一緒に勉強することができて、とても良い経験をさせていただきました。熱心な質問が数多くあって、私にもいい刺激になったと思います。

河田　何度か中国へもご一緒に行きましたが、現代の中国大陸にはお抹茶を飲む「茶道」がありません。中国で始まったお茶が、日本で「茶道」として発展し、今では中国に逆輸入されています。茶道に限らず、日本人は外国のものを巧みに取り入れて、それを継承、発展させていくのが上手です。それらはどういう形で日本の社会に受け入れられ、継承されてきたのでしょうか。

千　まず、昔から一種の教育システムが発達していたことが挙げられます。一つのものを伝授するための、社会的なシステムが伝統的に整っている。例えば茶の湯がそうですし、生け花もそうです。これは外国にはあまりありません。個人レベルではあるかもしれないけど、組織を作って伝授するシステムというのは少ない。知識や技術を伝授し、発展させていくという点で、外国と比べて日本はずっと優れていたのではないでしょうか。一方で明治維新以後は、欧米から入ってきた新しい学制、学校教育がある。この二つをうまく組み合わせたのが、今の日本の教育ではないでしょうか。非常に長い歴史と伝統を持っています。

河田　そういった日本独自のシステムの中でも、茶道や華道、剣道などには「道」としての精神性が入っています。書道も中国では「書法」なのに、日本では「道」を付けて書道になっています。と同時に、家元制度という日本独特のものが成立してきます。

千　「茶の湯」という言葉に対して、「茶道」という言葉が出てくるのは江戸期末頃になってからなのです。一説には儒教の影響もあるそうですが、日本化された儒教、言ってみれば武士道にも通じるものがあるかもしれません。もともと、お茶はテキストから学ぶものではありませんから、おのずと教養的な部分が「道」として現れてきたとも考えられます。

河田　明治維新後、各藩のもとで保護されてきた茶道は、うまく社会変革と近代化の道をたどってきます。いったいどのようにして生き残り、再構成されたのでしょうか。

千　それは流派によって異なります。学校教育とつながりを持つことで生き残ってきた流派もあります。例えば学校の課外活動のような形で、生徒たちに教えるシステムです。私どもの場合は、このように茶の湯の普及に学校教育制度を利用するのとは違って、茶の湯の「人」そのものを学校教育に委ねたのです。つまり茶人、特に家元を再教育するために積極的に学校に行かせたんですよ。明治初年当時、茶の湯の世界で学校教育を受けるという人は少なかったのですが、私の祖父などは苦しい時代にもかかわらず、東京で最高学府の教育を受けて京都に帰ってきているのです。そして、伝統を守りつつも根底にある茶の湯の本質を理論化して、昔のような以心伝心ではなく、言葉や活字で教える方法を考え出しました。

だいたい日本人は口で言うことを伝統的に嫌がります。今も、アメリカ人は自分の意見を言うことを小学校から教育されますが、日本人はうつむくことが多いでしょう。ディスカッションの大切さが言われるようになったのも最近です。祖父はそうではなく、茶の湯も「察する」ことに頼るのではなく、一定の時間内に、不特定多数の人が分かるようにしようと考えたのです。「伝統とは革新の集積である」という信念で今日まで歩んできたと言っても過言ではありません。

河田　伝統を担いながらも、社会の変化に応じて変わってこられたのですね。大学教育も同様で、10年後、20年後を見据えて社会が必要とする人材育成をしていきたいと思っています。今後は何が問題点なのか、それをいかに解決するかといった問題を発見、解決することのできる日本人が求められるのではないでしょうか。

◆海外での活動は日本文化を見直す機会

河田　日本人と外国人のディスカッションに対する姿勢の違いの話が出ましたが、関西大学では国際化を図るとともに、堂々と自分の意見を主張することを重要視しています。お家元は海外でのお茶会やローマ教皇謁見など多くの海外体験をお持ちですが、日本からの情報発信についてはどのようにお考えですか。

千　海外へ情報発信することによって、自分が今まで当たり前のように思ってきたことをもう一度見直す機会が与えられます。「分かってくれているであろう」とこちらが考えていることを、日本人同士ですと相手も遠慮して「今さらそんなこと聞けない」となるんです。ところが外国人、特に西洋人は分からないことは平気で聞いてきますから、「ここが第三者にとっては疑問なのか」と新たな発見があります。例えばお辞儀ひとつにしても、外国人たちは体を曲げてあいさつすると

学生たちには学ぶだけではなく、学んだことを実際に実践していってほしい。そして、品格と教養を身につけ、人間的魅力をもち活力ある人に成長していってほしい。

河田悌一（かわた　ていいち）
■1945年京都市生まれ。大阪外国語大学中国語学科卒業。
大阪大学大学院で中国哲学を専攻。和歌山大学助手、助教授を経て、1986年関西大学教授。国際交流センター所長、文学部長、副学長を歴任し、2003年10月学長に就任。1980年に米国エール大学、1991年に在外研究員としてプリンストン大学で中国思想史を研究。著書に『中国近代思想と現代』『中国を見つめて』（ともに研文出版）など。共訳に『フランス勤工倹学の回想』（岩波新書）。

いう習慣がないせいか、「なぜここでお辞儀をするのか」とよく尋ねてきます。そこで、分かるように説明すると、それまで質問しなかった日本人も「そういう意味だったんですか」となる。やはり知りたがっていたのです。だから、外国へ行くと、発信する以前に自分が勉強できます。

河田　海外に日本の文化を紹介することで、また日本人自身が新たな発見をするということですね。

千　特に日本という国は四方を海で囲まれ、国境一つで外国と接しているわけではないですからね。外国と交流し、積極的に出ていかないと、国際性は養われないと思いますよ。私にとっては、海外での活動は日本の文化を広めるという大それた思いよりも、自分が勉強させていただく、という気持ちのほうが強いですね。結果として、それが日本文化発信につながるとなれば望外の喜びです。

河田　関西大学には今、約400人の海外からの留学生がいます。外国人の方で官休庵に弟子入りされる方も多いと伺っていますが、日本人と比べて異なっている面はありますか。

千　全く同じですよ。日本人でも、今の若い人は日本の伝統文化はエキゾチックだと思っているんですよ。床の間がない家に住んでいる子もたくさんいますし、家に和室がないという子もいる。日本文化になじみがないんです。今の若い人たちはなじみがないだけに素直だし、非常に興味を持っています。逆にいうと、それだけ日常の生活から日本の伝統文化というものが失われてきたとも言えますね。

◆相手がいてこそ、「一期一会」

河田　私も四半世紀、お茶を学んできましたが、お茶というのは動きが非常に洗練されて、無駄な動きがない。お茶を通して、けじめや美意識についても学ぶことができました。それから、おけいこや茶会の場で異業種の方と知り合いになれて、さまざまなお話が伺えるのも大きな魅力です。お茶を学ぶことで、私も人間的に大きくなれたのではないかと思います。

千　茶の湯は一人ではできません。来てくれるお客様がいてこその芸能です。相手の方がいてこそ、「一期一会」が成り立ちます。だから、河田先生のように相手のことをお考えになって、相手のために何かをしようという思いの強い方は、茶の湯に入ってきていただきやすいのです。そういう意味では、人嫌いの方は向いていないかもしれませんね。そもそも茶の湯の社会はずっと平等だったんです。例えば、私が今日着ている十徳。これを着ているとフリーパスでどこでも出入りできたんですよ。江戸時代などは、本来、お殿様と普通の武士は直接顔も見られない、じかに口もきけないという時代です。商人とお殿様が直接話をするなんて、もってのほかです。しかし、茶席ならそれが可能だったんですよ。だから教育の場にも使われましたし、利休が切腹しなければならなくなったのも、その密室性を利用して政治に関わりすぎたからです。

河田　茶室には上段の間も中段の間もありません。床の間は道具を飾るところですから。そういうデモクラティックな雰囲気をずっと持ち続けているのが茶の湯です。一種の治外法権で、お茶の魅力は尽きませんね。

千　音楽で言えば、お茶は休止符なんです。そのまま煩雑な日常がずっと続いていくと、それは雑音の連なりにすぎません。しかし、お茶という休止符があることで、一つの音楽ができるんです。次の音が生きてくる。そう考えると、お茶というのは人間が生み出した知恵なんでしょうね。

◆いい先生に付いて、人格や品格を学べ

河田　しかし、茶の湯を「難しいこと」とか「格式ばっている」とか考える人も多いのではないでしょうか。

千　茶の湯というものは、いれ方だけなら教科書やビデオを見ても覚えられます。でも、人格や品格といったところまで学ぼうと思えば、いい先生に付かないと駄目です。教育も同じではないでしょうか。いくら大学へ行ったって、いい先生がいなければ何もならない。その先生の人間性を通じて学ぶことができるのは、人間として最高の幸せだと思います。もちろん、テキストだけでも勉強はできます。ただ、人格陶冶まで考えると、いい先生に付くことが大切だと思います。私どもの流派でも、単に指導者を増やすのではなく、魅力ある指導者を育てることを念頭に置いています。大学も同じではないでしょうか。卒業したらそれぞれの職場でリーダーになれるような魅力ある人間を育てるのが、大学の目的の一つですね。そうでなければ、わざわざ大学に行く意味がない。いい先生がいるから大学へ行くわけです。ですから、大学の経営陣の方も、いい先生を確保する、あるいは育てることをまず考えてほしいですね。

河田　確かに、技術だけ、知識だけなら大学でなくても専門学校でも得られます。大学の魅力とは、4年間、勉強はもちろん、サークルやクラブに入って活動したりインターンをしたりしながら、良き友を得、良き先生方と巡り合うこと、そしてリーダーとなれる魅力的な人間としての要件を持って卒業していってくれることだと思いますね。

千　学生たちは23～24歳で卒業するわけですが、やはりその後の長い人生には燃料補給も必要です。そのときに学校へ行ってみよう、あの先生に会ってみよう、と思わせるような大学であってほしいですね。単なる同窓会ではなく、40歳、50歳になってもう一度自分の道を振り返ることのできる場所が必要ではないでしょうか。

河田　生涯教育の視点ですね。現在の日本人は品格が劣化してきているような気がします。「読み書きそろばん」のほか、人格を形成し行儀作法を学ぶことが必要になってきていると感じています。そういう意味でも、茶の湯は大切な教育の場ですし、大学も社会に出てからの生涯教育の場としての重要性が増してきていると言えます。

◆建学の精神に誇りを持ち続けよう

河田　現在の小泉内閣による構造改革で一番大きく変わったのは大学です。これからの大学は教育と研究のほかに社会貢献をしなければならないと考えていますが、お家元はどうお考えですか。

千　お茶は「無用の用」です。直接今の生活には必要なものではありません。はっきり言って、文化というのは食べるため、生活するためにはあまり関係のないものです。文化というのはいわばプラスアルファですからね。ただ長い目で見れば、先生がおっしゃった「国民の品性」を育てることができます。「衣食足りて礼節を知る」と言いますが、食べることだけに夢中になっていると、品性が欠けてきます。品性があってこその人間です。その品性を身につけるために、若い人、特に私学に学ぶ人は、その学校の建学の精神というものを十分理解し、それを理解した上で勉強してほしいですね。建学の精神には創立者の思いが込められています。これを理解することは、卒業してからも大きな力になるのではないでしょうか。逆に学校側には、建学の精神を揺るぎないものとして誇りを持ち続けていただきたい。「関西の雄」である関西大学には、大いに期待しています。

河田　ありがとうございます。関西大学は建学の精神として「学の実化」ということを掲げています。これは言い換えれば「知行合一」という陽明学の精神です。学生たちには学ぶだけではなく、学んだことを実際に実践していってほしい。そして、品格と教養を身につけ、人間的魅力をもち活力ある人に成長してほしいと願っています。

関西大学は、近代国家に必要な法律知識を持つ自立した市民を養成することを目指して設立されて118年になります。先ほどおっしゃった「伝統とは革新の集積である」という言葉通り、時代のニーズに応えるべく改革に取り組んでいます。21世紀の地域社会で活躍し、国際社会で通用する人材をじっくり育てていきたいと思います。今日は本当にありがとうございました。

テキストだけでも勉強はできます。ただ、人格陶冶まで考えると、いい先生に付くことが大切だと思います。

千　宗守（せん　そうしゅ）
■1945年京都市生まれ。慶應義塾大学卒業、同大学院修士課程修了。1989年第14代「宗守」を襲名。欧米の各大学等より招聘を受け、講演・実技披露などを十数回にわたり行う。政府派遣の文化使節としてもヨーロッパ各国や中国へ赴く。1997年第15回京都府文化賞功労賞を受賞。帝塚山学院大学、大手前大学で客員教授を務める。『利休とその道統』『新修茶道妙境』『雪間の草』など著書多数。

LEADERS NOW!

■リーダーズ・ナウ［在学生・卒業生インタビュー］

地道な練習を重ねて上達を実感するとき

全日本大学速記競技大会で関大速記部が33連覇達成

◉文化会 速記部

運動部並みに休まず毎日続けている練習の成果は、抜群の成績に表れています。文化会速記部が5月に開催された第87回全日本大学速記競技大会において優勝し、33連覇の偉業を達成しました。

驚異的な連覇を可能にしたものは何か。ハードな練習はもちろん、チームワークの良さ、お互いの競争意識、合理的なレベル別の練習方法、先輩が後輩を指導するシステム、OB・OGとの絆…。メンバーの話を聞き、練習の様子を見ていると「強い理由」が浮かび上がってくるようです。

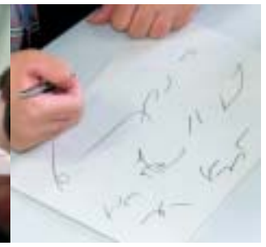
速記では、できるだけ素早く書くために独自の「速記文字」を使用します。速記文字にはさまざまな方式があり、関西大学では「山根式」を用いています。他に「衆議院式」「参議院式」「早稲田式」など、それぞれ独自に発展してきています。

「速記のできる人が少ないから特技になりますし、授業のノートを速記で書けることもメリットの一つです。もちろん、大抵の授業は普通の日本語でノートを取っています。どうしても先生の話に追いつかないときなど、緊急措置として速記文字を使います」と、速記部総務部長の荒井惠子さん（社会学部3年次生）。荒井さんは、入学するまで速記という言葉も知らなかったそうです。先輩に勧誘されて話を聞きにいったところ、雰囲気がとても良かったので入部。今では「一緒に生活しているような感じで、部室が第二の家みたい」になっています。

現在、部員は48人いますが、荒井さんに限らず、ほぼ全員が入学してから速記を始めています。同じく社会学部3年次生の藤本智美さんは、「勧誘されてすぐに自分の名前を速記文字で書いてもらって、びっくりしたというか衝撃だった」というのが入部のきっかけです。

初心者レベルから始めて、団体戦連覇、個人各級でも軒並み上位を占めるところまで上達するためには、厳しい練習を伴うのは当然です。お昼休みは毎日練習。水曜・土曜以外は授業のない５時限目も練習。夏休みと春休みに1週間の合宿があります。

「大会前の強化練習になると4年次生も練習に参加しますが、毎日の練習は3年次生が中心になって行っています。練習方法など、先輩から受け継いでいるものがいろいろあります。特に1年次生のうちに基礎をしっかり身につけないと応用が利きません。強化練習では授業の空いている時間は全部使いますし、春合宿ではほとんど一日中鉛筆を握っています」（荒井さん）



練習はレベルごとに分かれていて、読むスピードが異なります。最初は1分間に60字つまり1秒1文字の速さから始めて、1分間に260字の速さを目指し、段階的に進級していきます。速記は人が話したことを正確に書かなければならず、ミスをしている間は進級できません。速記部の中でも進級制度があり、級が上がったばかりだと速くて書けなくても、練習を重ねるにつれてだんだん書けるようになると言います。「手が自然とスムーズに動く」「最近イケてるやん」というような感覚的な上達の実感があるそうです。

「山根式は経済用語などにも対応した法則が多いので、授業中にも活用しています。速記部は行事が多い分、友達の輪も広がります。ただ、真剣に取り組むクラブなので、時間的に勉強と両立させるのが難しい面もあります」（浅田淳一さん：商学部3年次生）

特に、今年は部昇格50周年の記念すべき年です。連覇のプレッシャーも掛かるでしょう。「ここまで続いた連覇を途切れさせたらOBが怖い」という声も聞かれます。しかし、地道な練習風景の中に「目指すは40連覇」という自信がみなぎっていることは確かです。

夢の実現のために、あの試行錯誤の時期が必要だった

将来を決定づけた先生との出会い あきらめないで根気強くチャレンジ

◉国連難民高等弁務官事務所 保護官
赤阪 陽子 さん ―法学部法律学科 1991年卒業―

赤阪 陽子── あかさか ようこ
■1967（昭和42）年、大阪府生まれ。1991年関西大学法学部卒業。1992年にロータリー財団奨学生として米国コロンビア大学大学院留学、1994年同大学院（M.A.in International Affairs）修了。1995年AMDA（アジア医師連絡協議会）よりプログラムコーディネーターとしてロシアのチェチェン共和国に派遣される。1997年より国連難民高等弁務官事務所に移り、現在ミャンマーUNHCR事務所勤務。

ミャンマーの国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）で、バングラデシュから帰還してきた人たちの保護援助に奔走している赤阪陽子さんの国際社会との触れ合いは、関西大学在学中の1989年にジョージ・ワシントン大学との第1期交換留学生として留学したときに始まります。NGOの活動などを経て国連難民高等弁務官事務所に入り、現在8年目。「国際機関で働きたい」という関大時代の夢がかなったわけです。しかし、それまでは試行錯誤の連続。「これでいいのかと不安を抱いていた時期も長かったけれど、そのお陰で強くなれたし、賢くなれた部分もある。それは私にとっては必要な過程だった」と語る赤阪さんは、今、仕事への熱意と自信に満ちています。休暇で帰国中の赤阪さんを実家にお訪ねしました。

「92年にコロンビア大学で国際関係学を学んでいたとき、ちょうどクルドやハイチの難民問題が出てきて、アメリカでも大きな社会問題になりました。大学院を2年で終えて、NGOで旧ユーゴスラビアに行きました。その後、AMDA（アジア医師連絡協議会）からの派遣でチェチェンに行くまでしばらく日本にいました。当時27歳で収入はないし自立していないし、結果を出していない。簿記の学校に通ってみたりもしました。まさに試行錯誤の時期でした。理論は頭に入っているつもりでも、実際に行動の裏付けを伴っていませんでした。今は自信を持って生きていると言えるけれど、当時はそうではなかった。でも、劣等感があるから頑張れたと思う。今から考えたら、もっと近道ができたのではないかと思うけれど、それは必要な過程だったのです。チェチェンでは、たくさんの死を目の当たりにして本当に辞めようと思うことが何度もありましたが、辞めなかったことが今につながっています。あそこで１年過ごせたから、どこへ行っても大丈夫という自信になっています」

赤阪さんは千早赤阪村から片道２時間かけて関大に通学しました。その時間を利用して読書をし、英字新聞などで英語の力をつけ、時には睡眠に充てました。在学中は合気道部に所属し、上下関係が厳しい体育会で鍛えられ、礼儀を教えてもらったことが国際社会でも役に立っているそうです。

前任地のモルドバ共和国で

そして、人生に決定的な影響を与えた人との出会い。国際法、人道法分野の重鎮で、国連などの国際舞台でも活躍された故竹本正幸先生との出会いが、「あんなふうになれたらいいなぁ」というあこがれと「このままじゃいけない」という自覚を促しました。竹本ゼミに入り、それはアメリカの大学への留学に結びつきました。「竹本先生と出会っていなかったら、私はこの仕事には就いていなかった」

海外で暮らす赤阪さんにとって、飛び込んでくる日本のニュースが病んだ社会を浮き彫りにしているようで気になるところです。子どもの殺人や自殺、高校生売春、中学生のオヤジ狩りなど。

「最近、日本人って品がないなぁと感じることがあります。経済的に発展し、皆が中級以上になって、いわば“プチ成金”。自分は経済力があるという意識で、わがまま放題にした部分があるのではないか。人を敬うことをしないで、自分の地位や立場が上か下で判断し、高飛車に出る。親のそういう態度が子どもにも反映されているのではないでしょうか。子どもたちは、敏感に周りの状況に反応し、影響を受けます。例えば子ども時代に紛争を1年経験すると、それは彼らの人生の大きな割合を占めることになります。同じ時間を過ごしていても、大人の1年間とは大きく意味が違ってくる。そして子どもたちは、紛争状態を普通だと思ってしまいます」

赤阪さんは幼稚園や小学校のレベルで人権の教育をしたいと考えたことがあるそうです。というのは、子どもたちの間で起きる殺人やいじめ、自殺などは、人を人として敬うところが欠けているためで、それは小さい時から養われるべきだと考えるからです。

「この仕事はあこがれだけでできる仕事ではないし、派手な仕事ではありません。ただ、今やっていることがすごく楽しいのでUNHCRでの仕事を続けていたいと思いますが、この仕事がすべてだとは思っていません。面白いと感じることが変わればどんどんチャレンジしていきたい。夢は変わっていいものだし、したいこともどんどん変わっていけばいい。そのチャレンジ精神は捨てたくないですね。できるかできないかで判断するのではなく、やりたいと思ったらあきらめないで根気強く挑戦していくつもりです」

■研究最前線

好奇心全開で街へ出よう！ みんな目の付けどころが違う

「街歩き」10年のフィールドワーク 異質なものと出会う驚きと発見

◉社会学部 社会学専攻
永井 良和 教授

「街歩き」はすなわちフィールドワークですが、そう呼んでしまうと通りは良くても、この方法が持つ独自の意味が失われ、「好奇心」を育てながら現場に出て実践的に学ぶという教育面が抜け落ちてしまうようです。街を歩き、人を訪ねた学生が体験した驚きや発見を、自分の言葉で語ることを重視する永井教授自身、大学と社会の間を「行ったり来たりする存在」だと言います。

最近の日本社会は子どもたちも含めて、自分と異質なものに対して距離を置こうとするばかりか、排除しようとする傾向が見られます。異なるものを驚きと発見の目でとらえる「好奇心」が希薄になっているようです。「だんだん体力が衰えていきますが、目の力だけは維持したい」と言う永井先生の研究室を「のぞいて」みました。

街歩き10周年。永井ゼミの名物である「街歩き」が始まってから10年が過ぎました。「街を歩き、人を訪ね、本を読む。そして、考え、書く。――これを、ただひとつの約束としたい。街は広く、多くの人が暮らしている。その人たちを訪ねてみるのは、楽しいことだ。同じ街に暮らしているのに、考え方も生き方もちがう。だから驚きがあり、発見がある」（関西大学教育後援会発行『蒼』第100号）と、永井教授が書いたのが1995年。その前年から街歩きが始まっています。以来、「驚き」と「発見」を学生と共有しながら、永井教授は「都市社会学」「大衆文化論」を講義し、卒業研究を指導してきました。

近江八幡

阪堺 浜寺公園

今市

赤川

万博記念公園

鳥羽

新世界

名古屋港

島原

◉永井良和教授に聞く――

■自分の生きた時代背景を考え直す 社会学の勉強は何でもありだ

――この研究室の本棚にいろんなジャンルの本が並んでいるように、都市社会学や大衆文化論の分野は、雑多で幅広いのが特徴です。その中で「街歩き」に代表されるフィールドワーク中心の研究方法を続けてこられました。その方法は社交ダンスを「異文化」としてとらえ、その受容、排斥、葛藤の歴史を考察した初期の研究から一貫していますね。

フィールドワークもかつては目新しい言葉でした。私の学生時代のころは、人類学や民族学がその方法で成果を上げていました。逆に言うと、アフリカの部族社会まで行かないとフィールドワークの名に値しないというような風潮もありました。それに対して私は、海外へ行く度胸もなく金もなくても、国内でフィールドワークはできるはずだし、社会学の方法としても有効だと考えました。私たちが受けた方法論上の刺激を、なるべく古びない形で若い世代にも知ってもらいたいという思いもあって続けています。

「社会学部で何が勉強できるんですか」と高校生や受験生に聞かれると、「何でも」と答えます。それで物足りなさを感じる人もいますが、何でもできると聞いて喜んでくれる人のほうが柔軟性や自主性があると思います。私自身が社会学にひかれたのは、自分のしたいことをできたからです。25年ほど前の社会科学は、専門性は高かったかもしれないけど、間口が狭かったですから。

当時、社交ダンスは衰退の一途をたどっていました。京都に古いダンスホールが残っていて、たまたま踊っていただいた相手の方は母親よりも年上でしたが、とても上手なんですよ。プロとはこういうものだと思いました。そのプロの世界が消えつつあったわけで、何か調べてみたいなと思ったのがきっかけです。

ダンスの素養どころか、私は男子校出身で女性への接し方は全然駄目。大学に入って初めて女の子としゃべったので、どうコミュニケーションしてよいか分からない状態でした。そのリハビリも兼ねて、自分の生き方を見直すというか、自分の生きた時代をその背景から考え直すのが自分の研究だと思うようになりました。女性とうまくコミュニケーションできないというのも、男子校に通っている間に矯正されたからではないか。そこで奪われたものが何だったのか。

――時代背景を調べて、失われたもの、奪われたものが何だったのか考える。その考え方は、昨年出版された『南海ホークスがあったころ』（橋爪紳也氏との共著）にもつながっています。探偵や風俗の研究の場合もそうですか。

私自身が常に見られている感じを持っていました。カメラが普及するにつれて、人の生活をのぞき見することが一般的になりました。個人もジャーナリズムも、警察までもどんどん写真を撮るようになったのです。肉眼で見るのではなくレンズを通して見ることが世の中の主流になってきて、肉眼の文化、目で見る文化が衰えるのではないかと感じ、監視カメラなどのカメラ文化が拡大する以前にあるものが何なのか、関心を持ったのです。カメラが発達する前は、人は直接のぞいていました。社会科学の研究者はのぞきのことなど取り上げませんが、のぞきをテーマにして風俗や文化を考えようと、のぞき研究を始めました。

■面白いネタであっと言わせる快感 大学の正門までの間に人生を学べ

――社会へ出たら本の中に書いている理屈に合わないことがいっぱいあります。学生もやがて「都市社会」で勤める「大衆」の一人として生活していくことになります。それを先取りして街に出て学ぶということは、どのような意味を持っているのでしょうか。

まず、現場で働くおっちゃんやおばちゃんの声を聞いてこいということです。若かったら理屈なんて2年間でマスターできると思います。それよりは私のゼミにいる間に、理不尽なことの多い世の中について知っておいたほうが、きっと財産になります。私自身、学生に教えてもらうことが少なくありません。

街歩きを始めたころは学生数人と飲み会のついでに歩いていただけだったのです。そのうち事前に伝えると、毎回10～15人くらい集まるようになりました。そうなると気が付く点が違って、お互いに刺激にもなる。目の付けどころがみな違う。一つのものがどう違って見えるのかではなく、目線が全く違うのです。何にカメラを向けるか、何の前で足を止めるかで、初めて別の人の見方や考え方を知るわけです。

さらに、ゼミで発表するときにみんなに受けたいと思って頑張りますが、このイチビリ心がすごく大事なのです。「あんな面白いネタを拾ってきよった、負けられへんな」となる。こういう切磋琢磨が生まれてきます。理屈のお勉強を始めるとつぶし合いの議論になり、つぶしたものが勝ち残ることになります。そうではなくて、より面白いネタであっと言わせることができるのです。この快感をいっぺん知ったらやめられませんよ。

――送迎バスで通学しなければならない郊外の大学も多いですが、関大はその気になれば、門を出たらいつでも街歩きができます。ここで社会学部のＰＲもお願いします。

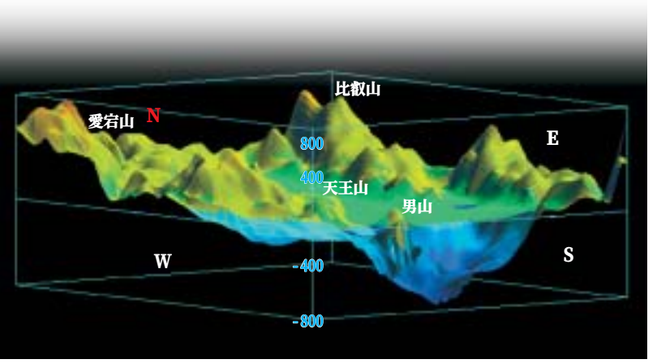
街歩きで人気があるのは、新しい商業施設ではなく昔からの商店街です。普通の住宅街に行っていきなり住民とお話をするのは無理ですが、商店街ならそれが可能です。

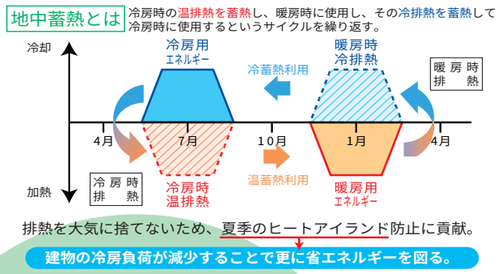
関大のように喫茶店や古本屋などがある学生街は貴重です。学生は大学の正門までの数百メートルで人生を学んでいると思います。

元気な関大、庶民派の関大というのも、トータルイメージとしていいと思いますが、もっと各学部で色合いの違いがあってほしいですね。最近は主体的に好奇心を表に出せる人が減ってきて、出し方が下手になっています。好奇心が全開で元気がある人は、何でもできる社会学部をお勧めします。

――好奇心がキーワードですね。永井流に考えれば、好奇心を発揮しにくくなったのはなぜか、時代背景を調べて、奪われたものが何だったのか追究し、好奇心の復権とともに自己回復を図ることも一つのテーマになりそうです。これからも驚きと発見に満ちた街歩きが続くことを期待しています。

■研究最前線





●工法の概要

工学技術が視点を変えれば自然を守る技術になる
古都の歴史の謎に迫り、省エネを実現する地盤工学

地下水をコントロールして安全・快適な都市づくりに 貢献

◉工学部 都市環境工学科 地盤システム工学研究室
楠見 晴重 教授

京都盆地の地下には巨大な水がめがあり、約211億㌧もの地下水が蓄えられている。――楠見教授が明らかにした京都の町の地下構造は、平安京以来1200年間にわたり文化都市として存続してきた歴史の謎に迫るとともに、未来の水利用に指針を与えるものでした。その研究の成果に基づいて、NHKスペシャル「アジア古都物語 千年の水脈たたえる都」が制作され、2002年6月に放映されました。その後も地下水に関する研究は進められていて、「現在の都市における地下水利用による蓄熱システムの構築」にまでテーマが広がっています。20世紀は石油の時代でしたが、21世紀は水の時代と言われています。専門の地盤工学をベースに、水の問題に取り組む楠見教授に取材しました。

■地下水の維持・管理から京都盆地の地下構造の解明へ

地盤システム工学研究室の研究対象は幅広く、「GISによる京都盆地の地下水維持・管理システムの構築」「都市地下水の利用による蓄熱システムの構築」「地下水・地盤汚染に関する研究」など水に関する研究は、10以上ある研究テーマの一部です。楠見教授自身、もともとトンネルやダムなどに関する岩盤工学、地盤工学を研究してきました。「そういう技術が視点を変えれば自然を守る技術になるのです」という言葉通り、防災や環境にかかわる研究にも力を入れています。「景観・樹木を保全した自然斜面の安定工法の開発」では、樹木を伐採せずに残して斜面の安定性を追求しています。自然に優しい技術と設計手法の確立を目指し、民間企業との共同研究を進めています。

地盤・岩盤の剛の世界と水という柔の世界が、この研究室では深くつながっています。それは今に始まったことではありません。楠見教授が「京都水盆」と呼ぶ京都の地下に広がる水がめ構造に着目し、仮説的な論文を書いたのは10年以上前です。京都の地下水の研究を始めたのはさらに以前にさかのぼります。

京都市の南にある城陽市の上水道の約80%は地下水でまかなわれています。八幡市でも上水道の50%を地下水に頼っています。地下水の維持・管理は重要課題で、楠見教授は城陽市と八幡市から委託されて、20年以上にわたり研究を続けてきました。地下水の利用はその市の中だけで考えるわけにはいきません。近隣の市や京都盆地全体で使える地下水の量がどれくらいあるのか、把握しておく必要があります。

NHKのディレクターから「現代の科学技術の力で、地下の世界を私たちに見せてください」と依頼されたのは、このような研究を積み重ねていたからです。

◉楠見晴重教授に聞く――

■広範な地下データを収集し、水資源を立体的に可視化

――京都水盆の全容を解明するのに、城陽市や八幡市で長年、地下水の有効利用に携わってきた経験がどのように生かされましたか。

城陽市は100m以下の地下水を、八幡市は150m以下の地下水を、それぞれ上水道に利用しています。直径が30cm、深さが300mの井戸で、1日当たり2000～2500㌧汲み上げます。4人家族で1日に使う量が約1㌧ですから、2000～2500世帯分をその井戸でまかなうことができます。約80%を地下水に頼っている城陽市で、汲み上げ量は年間約800万㌧です。これだけ汲み続けても、まだ余裕がある地下水脈に対して、興味は深まるばかりでした。

▲ネット施工直後
（平成13年4月3日撮影）

●植生の回復状況

▼2カ月後―ネット施工区域と未施工区域で植生繁殖に差が生じている。（平成13年6月5日撮影）

京都盆地全体が巨大な古生層の基盤の上にあり、古生層は極めて硬い岩盤で、水を通しにくいため、その上に大量の水が蓄えられていることは想定できました。盆地のあらゆる地点を掘り下げて、岩盤までの深さを調べれば岩盤全体の形が分かるわけですが、実際には不可能です。

――では、どのような方法で地下のデータを集められたのですか。

まず、ビルなどの建築時に行うボーリング調査に着目しました。京都市などの協力を得て、8000カ所近いボーリングデータを入手し、1本1本丹念に解析しました。ところが、そのデータはほとんど地下20～30mで、深くてもせいぜい200～300m。岩盤すなわち水盆の底まで届いたのは、山に近い数本だけでした。

ちょうど阪神・淡路大震災をきっかけに、京都でも活断層の調査が実施されていました。「反射法地震探査」という方法で、人工的に地震を起こしてその影響を受振器で測定し、地下の構造を明らかにする調査です。それで岩盤の深さを知ることができるのです。

ただこの調査は京都市内でしか実施されなかったため、京都盆地全体の地下構造をとらえることはできません。不明な地点を補っていく必要があります。そこで、地上の重力の差によって地下の岩盤の深さを推測する「重力探査」を用いました。これは地球の内部が均質だと仮定した場合の計算上の重力値と、実測値との差（重力異常）から地下構造を推測する方法です。

――これらのデータを組み合わせて、地下の姿を目に見えるようにすることができたのですね。

ソフトウェアの改良を重ねながら、立体的なCGを作り上げるのはかなり大変でした。その結果は予想通り、まさに水をためるのに理想的な地形が現れました。東西12km、南北33km、最深部は地下800m近くに及ぶ巨大な水盆です。地下水の出口は、天王山と男山に挟まれた幅1kmの狭隘部のみ。それもごく浅いものであることが確認されました。

試算すると、この水盆には約211億㌧の地下水が蓄えられています。琵琶湖の約275億㌧に匹敵する水量です。

京都は井戸の町で、平安時代の井戸の遺跡が1万以上あります。池は昔の高級官僚のステータスシンボルでした。京都では地下水を使いながら文化を生み出してきました。茶道も友禅も、酒や豆腐、お菓子なども良質の水が欠かせません。

今後、京都の地下水の循環システムがどうなっているか、研究を続けていく予定です。

――「都市地下水の利用による蓄熱システム」も、一種の循環システムですね。

東京都や大阪市は地下水を汲み上げるのを規制してきました。その結果、地下水位が上がり、構造物を破壊したり浮き上がらせたりする問題が起きています。また、地震が発生したときに地下水位が高いと液状化が起きます。地盤沈下を起こさないように地下水をコントロールして利用することが、地下の構造物に悪い影響を与えず液状化も防げる有効な方法だと思います。

地下水は常に温度が一定です。外気温との温度差を利用すれば省エネに役立てることができます。外気温が30～35度になる夏は、まず20度の地下水を上げて、30度くらいまで温もらせる。これを地下に戻しておき、外気温が10度になる冬に暖房用に使う。今度は10～20度になるから、夏が来るまで置いておいて冷房用に使う。現在、夏の冷房は、この熱を外に放出していることから、都市のヒートアイランド化の大きな原因の一つとなっていますが、この熱を地下水が蓄えるので、ヒートアイランドの軽減策にもつながります。

このシステムをビルの中に組み入れます。地下水をいったん上げてまた地下に注入しますから、地盤沈下が起こりにくくなります。それを今、シミュレーションしているところです。ビルのエネルギーの20%くらいはそれでまかなえます。そうすれば電力消費も抑えられて地球温暖化も防げます。地盤沈下を制御しながら蓄熱を進める方法です。

研究を始めて2年くらいで、まだ基礎的研究の段階です。新しい町づくりに地下水を使うこのようなシステムによって、過去の地盤沈下の教訓を生かし、安全性を高めることができます。

上海、台北、ハノイ、バンコクなど、アジアの都市では上水道を地下水に頼っていますが、やはり今、地盤沈下が起こっているのです。日本の技術が求められています。

――都市の地下水を積極的に利用して省エネを図る新技術が、実用化されることを期待しています。

Topics ■トピックス［学内情報］

経済学部創設100周年 現実の経済・実社会が見える経済学

◉時代の変化、社会のニーズに応えた人材育成―

経済学部長 森岡 孝二教授に聞く

関西大学経済学部は1904（明治37）年に創設され、今年、100周年を迎えました。創設時は1学年80人だった学生定員も、現在は800人に近い規模となっています。この100年の歩みを振り返りつつ、これからの経済学部のあり方について、経済学部長の森岡孝二教授にお話を伺いました。

◉「現場」を重視した経済学へ

――今年、経済学部は100周年を迎えました。この100年の歴史とはどのようなものだったのでしょうか。

経済学部が関西大学の前身である関西法律学校の経済学科として誕生したのは1904（明治37）年です。当時は、日本の資本主義が産業革命によって確立し、膨張主義を強めていった時期でもあります。それを象徴しているのが同じ年に起こった日露戦争です。その後、普通選挙運動や労働運動の影響を受けて大正デモクラシーの思潮が広がり、本学の経済学部もさらに発展を遂げていきました。全国の私大の経商系学部では、早稲田大学商学部、明治大学商学部、

昭和44年頃―経商学舎正面。左側は山岡順太郎の像

日本大学経済学部などと並ぶ伝統を有しています。今日では約3500人の学生が在籍し、5万人を超える卒業生が各界で活躍しています。

――経済環境が大きく変化する中、経済学部の教育も時代とともに変わってきたことと思います。特に、近年は変化もスピードアップしています。

社会科学のなかでは学術用語と日常用語が一番異なっている学問が経済学だと言われます。それだけに経済学では理論が大きな位置を占めています。もちろん理論は大切なのですが、理論教育を重視するだけでは学生のニーズに応えることが難しくなってきており、卒業後、社会人・企業人として必要な「教養としての経済学」に重きを置くべきではないかと考えています。言い換えれば、現実の経済、例えば企業の仕組みや労働や消費が見えてくるような経済学です。そのためには書物だけではなく、「現場」を重視することも必要になってくるでしょう。私自身は、講義にしてもゼミにしても、アルバイトや就職活動など、学生の現実的関心に応えるような問題を取り

本年9月竣工の第2（経商）学舎4号館（写真左）と、同館内の1000名収容の「BIGホール100」（右）

上げることで、社会に通用する学生を育てたいと考えています。

◉学生にとって魅力あるカリキュラムを

――「現実の経済や実社会が見える学問としての経済学」は、学生にとってもなかなか興味深いのではないでしょうか。

経済学部生の多くは必ずしも経済学という学問に興味を持って入学してくるわけではありません。高校までの教育で経済学がどんな学問かを学ぶ機会もありません。それだけに、こういった学生たちに、いかに「経済」への関心を持ってもらうかが大切だと考えています。そこで、経済学部では2003年の昼夜開講制導入を機に、さまざまな取り組みを始めました。

1年次の春学期には、学生を20人程度のグループに分けて、レポートの書き方やキャンパスライフについて、「経済学ワークショップ」という双方向的な授業を行い、大きな反響を呼んでいます。

また1年次の秋学期には経済学への導入として6～7人の先生によるリレー講義も行っています。内容は各先生方の専門を生かしたやさしい経済学入門ですが、テーマが多岐にわたることや、多くの先生と接することができることもあって、学生たちには益することが多いと思います。

全体では、デイタイムコースにおいて「理論・政策」「産業・国際」「歴史・社会」といった3分野別の履修モデルの提示によるゼネラリストの養成、「理論経済」「国際経済」「地域研究」「環境経済」「金融システム」「ビジネス」といった12のコース別履修モデルによるスペシャリストの養成があり、フレックスコースにおいて「開発」「日本・関西・大阪」「アジア」などのプロジェクト科目履修によるスキルアップなどが目玉となっています。また、国際化や環境といった学生が関心を持っている科目を重視し、カリキュラムを学生にとってより魅力あるものにしました。

◉「商都・大阪」の強みを生かして

――森岡教授は100周年の節目に学部長に就任されましたが、これからの経済学部についてはどのようにお考えでしょうか。

少子化が進み、これからはより一層の質的な充実を図らなければなりません。そのために、これまでの改革に安住することなく、経済学部をどのような学部にしていけばいいのか、長期展望をもって議論を起こしたいと考えています。そして、時代のニーズや学生の変化に合わせ、社会人・企業人として不可欠な教養の経済学を重視し、現行の履修モデルを発展させて、学生の興味・関心に応じた明確なコース制あるいは専修制の導入を検討する、という方向で改革ができればいいと思っています。それとともに「商都・大阪」にある大学としての強みも生かしていきたいと考えています。

――「大阪の強み」とはどのようなものでしょうか。

新しいビジネスやアイデアはしばしば大阪がその発祥の地となっています。発想の柔軟性・自由さ、創意工夫といったものは大阪の強みと言えるでしょう。他にも、歴史的・産業的にアジアとのつながりが深いことも、日本の他の都市とは違う強みなのではないでしょうか。こういった利点を生かしながら、しかもそれを越えて、関西・大阪だけにこだわるのではない、グローバルな見地を持った人材を育てていきたいですね。

JOINT PROGRAM

■連携事業／地域連携

地域との共生を目指して

吹田市・高槻市と連携協力 ～産業・教育・文化・まちづくり～

高槻市（左）、吹田市（右）との調印式

関西大学は、キャンパスのある吹田市及び高槻市と地域連携に関する協定を結びました。7月14日に高槻市（奥本務市長）と、8月5日に吹田市（阪口善雄市長）との間で、調印式が行われました。地域連携は、市民講座の開催や学校インターンシップの実施など、すでに進行しているプログラムもありますが、今後は大学全体として総合的に連携事業を進めることになります。地域連携の現状を、学長補佐のコメントと併せてお伝えします。

吹田市との「連携協力に関する基本協定書調印式」で、河田悌一学長は「この地に来て80年以上になる本学は、現代の国際化社会、情報化社会に対応する開かれた大学として、まず地域に根ざし貢献できる大学であることを目指しています。ただ協定書に調印をするだけでなく、実を上げていき、学園都市として魅力ある町になるように貢献していく所存です」と抱負を述べました。

このたびの協定は、吹田市、高槻市ともに、相互に知的・人的資源の交流を図ることにより、産業、教育、文化、まちづくり等の分野において、双方の発展と充実に寄与し、地域連携を積極的に推進することを目的としています。具体的には、企業へのインターンシップ、学校インターンシップの推進、大学主催による市民向け各種講座の開講等、さらに、ベンチャービジネスの育成、市職員の大学院への受け入れ、学生のアイデアを採り入れた産業活性化策の検討等、さまざまな連携協力を推進していく予定です。

吹田市の阪口市長からは、連携協力を通じて地方分権の時代を担う人材を育て、まちづくりに生かしていきたいという意向も示されました。

また、高槻市では、研究機能や学生の若い感性や行動力をまちづくりに生かすため、市が開催するパソコン講習に総合情報学部生を講師として招へいすることも計画しています。

これまでも市民向けの講座の開講や教育委員会との連携による学校インターンシップを行ってきましたが、この協定締結により、一層の連携協力を図り、まちづくりの問題なども含めた地域連携を推進してくことになります。

◆成長促すインターンシップ

●学長補佐・文学部教授
品川 哲彦

学校インターンシップに関しては、ずいぶんと成果が見られます。高校や中学で学生がより若い世代と接し、子どもたちから年長者として、また先生のように見られる中で、自分自身に自信を持ったり、自分の立場をわきまえるようになり、成長がうかがわれます。

学校側の要求と学生側の希望を出してマッチングするわけですが、注意しなければならないのはボランティアとの違いです。学生が個々に掲示板などを見て参加するボランティアは、大学が直接かかわっていません。インターンシップは単位になる分、大学が責任を持って、きっちり事前講習やマナー講習を行って送り出します。受け入れ先の学校には、手伝ってくれる若者が来たというだけではなく、やはり未熟なのだからしっかり指導していただきたい。

今は、学生を大学の中に囲い込んで育てるという時代ではありません。高校や中学に大学生が入っていき、私たち教員も出張授業で高校に伺います。ビジネスインターンシップでも、大学生の段階から育てるつもりで受け入れてくださっている企業もあります。少子化の時代、家庭、地域、学校、職場が共に協力して若い世代を育てるという取り組みが求められています。大学もまたこの一翼を担うわけで、今後も地域、学校、企業との連携を築いていきたいと考えております。

◆ITを中心に生涯教育支援

●学長補佐・総合情報学部教授
広兼 道幸

自治体行政はe-Japan計画を受けて、セキュリティの問題や情報公開、文書管理のあり方など、たくさんの問題を抱えています。そういう中でいろいろな勉強会などに私たち教員やゼミの学生も参加しています。実際に現場で何に困っているか、そのシステムが現場で使えるかどうか、どこに問題があるのかも分かります。

高槻市では市民対象のパソコン教室も実施しています。かなり高齢の方を対象に、親子くらい年齢差がある学生がインストラクターになって教えています。教えることで自分の技術や能力を確認できます。世代を超えて多くの人と付き合い、教える難しさや楽しさを知ることが、学生にとっては実践的な勉強になり、人間的な成長にもつながる貴重な経験になるでしょう。

Topics ■トピックス［学内情報］

関西大学博物館開設10周年
市民が出入りできるオープンスペース
学生が素直に見て楽しい博物館に

◉モノ学の中核的役割を担う――

高橋 隆博 博物館長に聞く

1994（平成6）年4月開館の博物館が10周年を迎えました。考古・歴史・民俗・美術工芸・自然科学などの資料、約1万5千点を収蔵し、その中には重要文化財16点、重要美術品12点も含まれています。日本の大学博物館として質量ともにトップクラスです。

大学の教育研究施設としても、考古学・歴史学関係の授業や博物館実習などを行っているほか、「考古学入門講座」などの公開講座や講演会を開催し、市民の方にも親しまれています。10年の歩みを振り返り、今後の課題や新しい取り組みについて伺いました。

◉文献学（図書館）とモノ学（博物館）

――博物館は10周年ですが、その前身の「考古学資料室」を故末永雅雄名誉教授が主導された時から数えると50年が経過しています。考古学資料の収集・保存と調査研究に関しては、半世紀の歴史があるわけです。また、所蔵資料の中心が、本山コレクションと呼ばれる本山彦一（松蔭）氏が収集した考古学資料であったため、考古学の博物館というイメージが強いようです。

黒漆塗玳瑁螺鈿合子（たいまいらでんごうす）（北村昭斎作）

確かに、文化勲章受章者である末永雅雄先生やその学問を引き継がれた網干善教先生の情熱と努力で生まれた博物館です。両先生と本学の学生たちが中心となって1972年に高松塚古墳を発掘したことからも、考古学研究の拠点として知られるようになりました。

それはそれでありがたいことなのですが、この博物館には考古学資料以外にも、魅力的な展示品がたくさんあるのです。特にここ数年は学生の教育と研究に資するため、美術工芸品なども系統的に集めるように心掛けています。古い陶磁器など少しくらい傷があっても、学生の教育研究用には差し支えないわけですから。

時代を限定せず、美しい工芸品なども収集しています。例えば、重要無形文化財保持者つまり人間国宝の北村昭斎先生の作品などもあります。これは博物館学の実習教材用に何か作ってくれませんかと北村先生にお願いしたところ、材料費にもならないような金額で、学生のために作っていただいたものです。

――このような作品が博物館にあることを知っている関大生が少ないのが残念ですね。図書館を一度も利用しない学生はいないでしょうが、博物館に足を踏み入れたことのない学生はいます。大学が博物館を持つ意味は何でしょうか。

日本の大学では文字に頼った教育と研究が主です。ところが、考古学や民俗学は文献がない世界なのです。浮世絵を例に考えると、北斎や写楽などに関しては、まったく文献資料が見当たりません。残されているのは作品（モノ資料）です。日本は明治以来、文献学が中心で、この伝統は今も続いています。これに対して、モノ学の中核的役割を担っているのが博物館です。文献学の中心の図書館、そして博物館。この二つは車の両輪でなければならないと思います。今は片方だけがぐるぐる回っている状態です。モノ学が動き出すことによって車がスムーズに進んでいく、つまりバランスの良い教育・研究ができるのです。

◉好評だった「なんでも相談会」

――一般の方を対象とする講演会やセミナーのほうは、かなり盛況です。昨年からは新しい試みとして、「なんでも相談会」が始まりました。

「なんでも相談会」を始めた大きな理由は、博物館は社会教育機関であり、地域社会と大学の接点だと考えるからです。博物館はオープンスペースであり、市民が出入りできる空間なのです。関西大学の博物館は、学生の教育と研究のための施設であるとともに、地域の住民に活用していただく博物館であることも、これから考えていかなければなりません。

今まで地域に対する働きかけとしては、講演会などを実施してきましたが、これでは不十分です。もう少し気楽に、子どもからお年寄りまで地域の人々に利用していただこうと、小中学生の自由研究にも対応できるし、ご家庭で持っておられる「お宝」についても、各分野の専門家に相談できるという催しが「なんでも相談会」です。

小学生から70代の方まで、遠方からも来られて喜んでいただきました。掛け軸、焼き物、古文書類をはじめ、小中学生からは昆虫類の標本などが持ち込まれました。それに対応するために、考古、歴史、民俗、美術の専門家だけでなく、大阪市立自然史博物館の館長をなさった先生もお招きしました。教員も大学院の学生も参加して、和気あいあいとした雰囲気で、懇切にお応えできたと思います。

――これからの課題や特にアピールしたいことは何でしょうか。

喫茶店に入るような気楽な気持ちで、ぶらりと来て親しんでもらえるような場所であってほしいですね。学生だけでなく、先生方にも博物館の存在をよく知っていただきたい。そのために、こちらも努力をして、魅力のある催しをしなければなりません。これは全国の大学博物館共通の課題でもあります。

歴史や美術を学んでいなくても、素直に見て楽しいこと。それが大事です。まず目に飛び込んでくるものがあり、それが興味につながります。勉強はそれからのことです。楽しいからもう一度行きたいと思えるような博物館にしたいですね。もちろん、学生に勉強のモチベーションを提供することも重要な役割です。

関大も女子学生が多くなっていますので、女子学生が行ってみたい、できれば研究してみたいと感じられるような展示や企画を考えていきたいですね。

KANDAI NEWS

2006年4月「会計専門職大学院」開設を目指す

公認会計士法の改正をはじめ、会計士試験規則を改正する内閣府令の公表等、わが国の職業会計士養成教育の方向が明確にされたことを背景に、本学ではアカウンティングスクール構想の検討を行ってきました。その結果、「会計専門職大学院（仮称）」の基本骨子を取りまとめ、このたび全学的な合意が得られました。今後、この基本骨子をもとに、2006（平成18）年4月の開設を目指し、具体的な設置計画・内容について検討が進められます。

中之島センター開設

大阪市役所や中央公会堂と並び、大阪の代表的な都市景観を構成する中之島図書館別館に、本年4月、「関西大学中之島センター」が開設されました。本学は当別館の1階（会議室3部屋、講義室、事務室）及び4階（会議室）を活用し、主に法科大学院のサテライト教室として「リーガルクリニック」科目を開講します。これまでに市民法律相談なども行っており、地域に根ざした活動を行う予定です。また、インフォメーションセンターとして本学が発信する各種の情報提供を行うなど、今後、本学の大阪都心部の拠点として、学生、校友、その他多くの人々の交流の場、学びの場として、ますます幅広い活用が期待されます。

クリエイション・コア東大阪に産学連携拠点

大阪のものづくり産業を支援する拠点施設として設置されたクリエイション・コア東大阪に、「関西大学産学連携オフィス 東大阪サテライト」が開設されました。本学はすでに大阪東部地域で「八尾バリテク研究会」や「小型風力発電機開発プロジェクト」を立ち上げ、地域密着型の事業を推進しています。当サテライトは、これら事業の活動拠点として、本学の産学連携活動を紹介するショールームとして、常時オープンしています。なお、中小企業診断士・社会保険労務士の資格を持つ産学連携コーディネーターが技術相談等にも対応いたします。

◆アテネ五輪で健闘、学内からも大声援

競泳　自由形　山田沙知子さん

女子サッカー　下小鶴　綾さん

8月に開催されたアテネ・オリンピックに、本学から2人の現役学生が出場し、活躍しました。山田沙知子さん（文学部4年次生）は、出場2種目のうち、競泳の女子自由形400mで6位入賞という好成績を収めました。また、女子サッカーにディフェンスとして出場の下小鶴綾さん（文学部4年次生）は、決勝トーナメント準々決勝進出を果たし、攻守に大活躍しました。

400m決勝当日の8月16日に千里山キャンパスで開かれた「山田沙知子さんを応援する会」には、深夜にもかかわらず学生や教職員約70人が参加。校旗や横断幕、紙テープ、メガホンなどの応援グッズを手に、キャンパスからアテネに向けて大声援を送りました。

日本代表選手として想像を絶するプレッシャーの中、立派な戦いぶりを見せてくれた2人を称えましょう。

120th KANSAI UNIVERSITY Established in 1886
関西大学は、2006年（平成18年）に創立120周年を迎えます。

文部科学省の平成１６年度 大学教育改革支援プログラムに 本学の３件の取り組みが採択

文部科学省が、各大学の教育プロジェクトから社会的要請の強い優れた取組を選定するとともに、重点的な財政支援を行う「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に本学のプロジェクトが採択されました。採択されたテーマは、「進化するe-Learningの展開―授業と学習の統合的支援および教授法と学習コンテンツの共有化―」です。これは、Webを介して、事前に予習内容を受講生に周知、授業後には小テストを含めた復習を行うという授業と自学自習のあいだに有機的なサイクルを築き上げるものです。

また、優れた教育を行う法科大学院や専門職大学院に予算を重点配分する「法科大学院等専門職大学院形成支援プログラム」に本学のプロジェクト「司法過疎問題解消に貢献する法曹の養成―〈リーガル・クリニック〉の地方展開―」及び京都大学等と行う共同プロジェクト「実務基礎教育の在り方に関する調査研究」が採択されました。

理事長に 森本靖一郎氏が就任

10月1日開催の学校法人関西大学評議員会および理事会において役員の選任が行われ、理事長に森本靖一郎氏が選任されました。任期は2004（平成16）年10月1日から4年間。森本理事長は1932（昭和7）年奈良県生まれ。畝傍高校を経て関西大学に入学、文学部国文学科と法学部を卒業後、母校に奉職。67年に関西大学教育後援会幹事長に就任し、「大学と家庭のかけ橋」をモットーに、関西大学と父母との間に信頼の絆を作り上げました。飛鳥文化研究所の開設や、他大学に先んじて実現した父母を対象とした教育懇談会など、先見の企画や数々の事業・イベントが、その卓越した発想力から生まれました。84年から評議員、92年理事、常務理事を経て、2000（平成12）年10月専務理事に就任。学校法人の財政基盤の強化、キャンパス環境の整備、魅力あふれる大学づくりに尽力し、その行動力と仕事への情熱はつとに有名です。

■連携事業／高大連携

「学校インターンシップ」

教育現場を広く体験 体育祭・文化祭の行事補助で活躍

「学校インターンシッププログラム」は、大阪府、神戸市、大阪市の各教育委員会と連携協定を締結して2003年度にスタートしました。38高校に延べ96人の学生を派遣し、単独大学が行う学校インターンシップ事業としては全国一の規模になりました。今年度も300人を超える学生がプログラムに参加します。

竹中瑠衣さん（文学部2年次生）は、大阪府立三島高等学校で8月18日〜9月18日の1カ月間、インターンシップ生として主に体育祭と文化祭の補助・準備に携わりました。

「一輪車だけでなく、バケツでも水を捨てに行ったほうが早いよ」。雨上がりの水たまりに白い雲の浮かぶグラウンドでは、生徒たちが明日の体育祭の準備で動き回っています。生徒たちより少しだけお姉さんの竹中さんは、自らバケツで泥水をすくい、スポンジに含ませては絞り、不良のグラウンドコンディションの改善に余念がありません。

「ここの高校は自由な雰囲気で、生徒も自立心があり、先生の手を借りずに自分たちでやろう、成功させようという面が強いので、最初は何をお手伝いしたらいいのか分かりませんでした。行き過ぎたら押し付けになりますし……。教員志望ですので、先生のほうに目を向けていたのですが、やっているうちに先生をまねるよりも今の自分を生かすことの大切さに気がつきました。インターンシップに来て何を求められているのかというと、生徒でもなく教員でもなく、その間の立場を積極的に生かすことだと思います。生徒は大学生の生の声を求めていることも分かりました」

竹中さんがインターンシップに参加した動機は、教育実習で授業を担当するだけでは教師の仕事の全貌は見えてこない、体育祭や文化祭も経験してみたいと考えたからです。生徒から指定校入試の相談を受けたとき、いろいろ話し合ってアドバイスを送ったところ、後日「受かったよ」と、満面の笑顔で報告してくれたそうです。「自分のしたことが認められたような気がしてうれしかったですね」

インターンシップの学生担当の松井克行先生にも、お話を伺いました。

「体育祭や文化祭は、生徒には任せられないような突発的な仕事が多く出てきます。なるべく生徒会の会議にも出てもらって、どういう運営をやっているか見てほしい。教員の便利屋さんで終わらず、教員と生徒の間に立ち、批判的な視点も持ってほしいと思います。行事はその学校が独自のやり方でずっと行ってきているので、必ずしも合理性があるわけではなく、新しい目を持つ若い人の意見は歓迎します。積極的にかかわることにより、学生さんのコミュニケーション能力も養われるでしょう」

あいにく体育祭は台風のため1日順延されましたが、翌9月8日、無事に開催することができました。

Reed KANSAI UNIVERSITY NEWS LETTER
No. 3 October, 2004
発行日・2004年（平成16年）10月15日
発行・関西大学 企画室広報課
大阪府吹田市山手町3-3-35
〒564-8680／TEL.06-6368-1121
http://www.kansai-u.ac.jp/
関西大学

Reed

Man is a Thinking Reed.

KANSAI UNIVERSITY NEWS LETTER

No. 3
October, 2004
関西大学ニューズレター
発行日：2004年（平成16年）10月15日
発　行：関西大学 企画室広報課
大阪府吹田市山手町3-3-35
〒564-8680／TEL.06-6368-1121
http://www.kansai-u.ac.jp/

■対談
千　宗守（武者小路千家 家元、財団法人官休庵 理事長）×河田 悌一（学長）
魅力ある先生が 魅力ある人間を育てる
「無用の用」の文化は人間の品格の源―1

■リーダーズ・ナウ―5
在学生― 文化会 速記部
卒業生― 国連難民高等弁務官事務所 保護官・赤阪 陽子 さん

■研究最前線
「街歩き」10年のフィールドワーク
異質なものと出会う驚きと発見 ―7
社会学部 社会学専攻―永井 良和 教授

地下水をコントロールして安全・快適な都市づくりに貢献 ―9
工学部 都市環境工学科 地盤システム工学研究室―楠見 晴重 教授

■トピックス［学内情報］
経済学部創設100周年・現実の経済・実社会が見える経済学 ―11

関西大学博物館開設10周年 ―13
市民が出入りできるオープンスペース
学生が素直に見て楽しい博物館に

■連携事業
地域との共生を目指して
吹田市・高槻市と連携協力〜産業・教育・文化・まちづくり〜 ―11

「学校インターンシップ」
教育現場を広く体験　体育祭・文化祭の行事補助で活躍 ―15

■関大ニュース―15
文部科学省の平成16年度大学教育改革支援プログラムに
本学の3件の取り組みが採択　ほか